

「降り積もれ孤独な死よ」を観て考えたこと
— 子どもが安心して過ごせる「居場所」を社会でどう支えるか —

先日、ドラマ「降り積もれ孤独な死よ」を全話観ました。
サスペンスドラマとして、複雑に絡み合う人間関係や、過去と現在を行き来しながら少しずつ真相に近づいていく展開には、十分に引き込まれるものがありました。登場人物一人ひとりにも、それぞれの背景や抱えているものがあり、単純に「善」と「悪」に分けられない人間模様が描かれていました。

しかし、全話を観終わって私の心に残ったのは、事件の謎解きだけではありませんでした。
むしろ強く感じたのは、「なぜ、子どもたちはあのような環境に置かれなければならないのだろう」ということでした。

子どもにとって、本来、家庭は安心して過ごせる場所であるはずです。自分を受け止めてもらい、困ったときには助けてもらい、失敗しても「大丈夫」と言ってもらえる。そんな場所が家庭であってほしいと思います。

ところが、虐待、ネグレクト、親子関係の確執、経済的困窮、親自身の孤立などによって、その「家庭」という居場所を失ってしまう子どもたちがいます。家庭にいても安心できない。
親に頼ることができない。
学校にも居場所がない。
誰かに相談したくても、誰に相談すればよいのか分からない。
そのような状態になった子どもが、心の中で「自分には居場所がない」と感じてしまうことは、決して特別なことではないのかもしれません。

虐待は、世代を超えて連鎖することがある

ドラマを観ながら考えたもう一つのことは、虐待の「連鎖」という問題です。虐待を受けて育った子どもが、成長して親になったとき、自分が受けた子育ての経験が無意識のうちに繰り返してしまうことがあります。
もちろん、虐待を受けた人が必ず虐待をする親になるわけではありません。

しかし、自分自身が愛された経験や、安心して親に頼る経験を十分に持てなかった場合、「子どもとの関係をどうつくればよいのか」が分からず、苦しんでしまうことがあります。
そこに経済的な困窮、夫婦関係の問題、仕事の不安、地域からの孤立などが重なると、親自身が追い詰められ、子どもへのネグレクトや虐待につながってしまうこともあります。

だからこそ、虐待という問題を考えるとき、単純に「悪い親だから」と片付け

てしまうのではなく、

「その親自身も、誰かの支えを必要としているのではないか」

という視点を持つことが大切なのだと思います。

もちろん、虐待から子どもを守ることは最優先です。

その一方で、親を孤立させないことも、子どもを守るための大切な支援なのではないでしょうか。

「家庭」という居場所を失った子どもたち

子どもが家庭という安心できる場所を失ったとき、その子はどこへ向かえばよいのでしょうか。

学校に行けなくなったとき、学校以外に安心して過ごせる場所があるでしょうか。

親に相談できないとき、親以外に頼れる大人がいるでしょうか。

「助けて」と言葉にできないとき、その小さな変化に気づいてくれる人がいるでしょうか。

私は、ここに地域社会の役割があるのだと思います。

子どもにとって必要なのは、立派な施設だけではありません。

「いつでも話を聞いてくれる人がいる」

「困ったときに相談できる人がいる」

「自分のことを気にかけてくれている人がいる」

「そのままの自分を受け止めてくれる場所がある」

そうした人とのつながりそのものが、子どもにとって大きな「居場所」になるのではないのでしょうか。

子どもだけでなく、親にも「居場所」が必要

そして、子どもの居場所を考えると、親の居場所についても考える必要があります。

子育てに悩んでいる親が、「こんなことを相談したら責められるのではないか」と思ってしまえば、誰にも相談できなくなります。

経済的に苦しくても、「自分がしっかりしなければ」と一人で抱えてしまう。

夫婦関係や親子関係に悩んでいても、周囲に知られたくないと思ってしまう。

そうして家庭が社会から孤立していくと、問題が見えにくくなり、子どもも親も苦しさを抱え込むことになります。

だからこそ、

「困ったときに相談してもいい」

「一人で抱えなくてもいい」

「助けを求めてもいい」

と思える地域をつくることが重要なのだと思います。

「助けて」と言える前に、こちらから近づく

私はこれまで、不登校やひきこもりの子どもたちへの支援について考えてきました。

その中で感じるのは、支援を必要としている家庭ほど、自分から相談窓口へ足を運ぶことが難しい場合があるということです。

「相談する力」が残っていない。

どこに相談すればいいのかわからない。

これまで誰にも理解してもらえなかった経験がある。

そんな家庭に対して、「困ったら相談してください」と窓口を用意するだけでは、十分ではないのかもしれない。

だからこそ、訪問型の支援、アウトリーチによって、支援する側から家庭に近づいていくことに意味があります。

最初から問題を解決しようとするのではなく、

「こんにちは」

「何か困っていることはありませんか」

「いつでも相談してください」

と、細くてもいいからつながりをつくる。

そのつながりが、子どもや親にとって「自分たちは一人ではない」と感じるきっかけになるかもしれません。

「孤独」を積み重ねない社会へ

「降り積もれ孤独な死よ」という作品を観て、私は「孤独」というものは、突然生まれるものではないのではないかと考えました。

小さな孤立が積み重なる。

誰にも相談できないことが積み重なる。

家庭の中の葛藤が積み重なる。

経済的な苦しさの積み重なる。

親自身の生きづらさが積み重なる。

そして、子どもが「自分には居場所がない」と感じるようになる。

まさに、孤独が少しずつ「降り積もっていく」のです。

だからこそ、私たちが目指すべきなのは、問題が大きくなってから救う社会だけではなく、孤独が積み始められた段階で誰かが気づき、つながることのできる社会なのではないでしょうか。

子どもに頼れる親がいる。

親にも頼れる人がいる。

地域の中に気にかけてくれる人がいる。

学校にも、地域にも、家庭にも、「困ったときには誰かが支えてくれる」とい

う安心感がある。

そんな環境があれば、子どもたちは、家庭や地域の中で安心して自分らしく過ごすことができるのではないのでしょうか。

「居場所」とは、単にそこに居られる場所ではありません。

「あなたがここにいていい」と誰かが伝えてくれる場所。

そして、

「困ったときには、誰かに頼っていい」と思える関係。

それが本当の意味での「居場所」なのだと思います。

このドラマは、サスペンスとして楽しませてくれました。

しかし、全話を観終わった今、私の中に残ったのは、事件の真相以上に、子どもたちの孤独と、彼らを取り巻く大人や社会の在り方についての問いでした。子どもが「助けて」と言える社会をつくる。

そして、それ以上に、

「助けて」と言えない子どもにも、こちらから気づいて近づいていく。

そんな地域社会をつくっていくことが、子どもたちの孤独を減らし、悲劇を未然に防ぐ一歩になるのではないのでしょうか。

一人の子どもが安心して過ごせる場所を持つこと。

一人の親が孤立せずに子育てできること。

そして、家庭だけにすべてを背負わせず、地域全体で子どもと家庭を支えていくこと。

それは、特別な誰かが担うものではなく、私たち一人ひとりが地域の中でできることから始まるのだと思います。

「あなたは一人ではない」

そう伝えられる人や場所が、地域の中に一つでも多く存在する社会をつくっていきたい。

このドラマを観終えて、そんなことを改めて考えました。